

## 第7部 レビューについて

「ソフトウェアの品質」については、すでに第5章で述べた。このソフトウェアの品質を良くするために、ソフトウェアの作り方（ソフトウェア・プロセス）を改善してゆくことが重要である<sup>1</sup>。

その開発の中間段階で作成されるものを含めてソフトウェア開発の成果物をチェックして、直接ソフトウェアの品質を良くしようとする作業には、テストとレビューがある。

しかしテストには、大きな制約がある。つまりテストとは、作成したプログラムを実際にコンピュータで稼働させ、その処理の結果が当初想定したものと一致しているかどうかをチェックすることで行われる。したがって、プログラムを作成した後でなければテストを行うことはできない。

後で本文の中でも述べるが、実際にプログラムに埋め込まれる欠陥の過半数は、プログラム作成より前の段階、つまり要件定義や設計の段階での欠陥であるという調査の結果がある。間違っただけの要件定義書に基づいてなされた正しい設計は、間違っただけの設計となる。その間違っただけの設計を基にした正しいプログラミングもまた、間違っただけのプログラムを生み出す。テストは、プログラミングの後でこのプログラムが間違っていることを指摘する。だからこのテストで発見された欠陥を取り除き、正しいものにするためには、要件定義まで遡って修正作業を行わなければならない、大幅な手戻りが発生する。テストはたいへん重要な作業であるけれど、ソフトウェア開発の生産性を上げる方法の1つはこの手戻りを極力避けることであるから、テストはその意味では限界がある。

レビューは成果物が生み出された直後に行うことができ、うまくレビューを行うことは品質の向上と同時に、大幅な手戻りを回避することに繋がる。ここに、レビューの重要性がある。

テスト技術者のための国際資格である ISTQB（International Software Testing Qualification Board）ではレビューを「静的テスト」と呼び、広い意味でのテストの一部と位置づけている[GRA06]。この考え方は、よく理解できる。しかしレビューは、要件定義書から始まって各種の設計書、ソース・プログラム、テストの計画書やテストシナリオ、移行の計画書／手順書、ユーザ向けなどのマニュアルや資料、さらには保守作業にまで、ソフトウェアの広い意味での開発で幅広く使える技術であるから、この原稿ではレビューをテストとは独立して取り扱うことにする。

第7部は、第18章だけから構成される。ここではインスペクションを含む、いくつかの種類のレビューについて述べる。

### 略語

ISTQB : International Software Testing Qualification Board

### 参考文献とリンク先

[GRA06] ドロシー・グラハム他著、秋山浩一他訳、「ISTQB シラバス準拠 ソフトウェアテス

---

<sup>1</sup> ソフトウェア・プロセス改善の必要性については、第17部（第39章から第41章）で述べる。

トの基礎」、センゲージ・ラーニング（株）、2008年。

この本の原書は、以下のものである。

Dorothy Graham, Erik van Veenendaal, Isabel Evans, and Rex Black, “Foundations of Software Testing : ISTQB Certification,” Cengage Learning, 2006.